



「鯉」切り絵  
若原 愛子さん(高倉町田井)



「あさがお」絵手紙  
三村 節子さん(伊賀町)



「わらじ」手芸  
加藤 美津子さん(備中町布賀)



「這へば立て 立てば歩めの 親心」手芸  
太田 政江さん(有漢町有漢)

## ミニ★ピクツ



### 誠蓮 (マコトバス)

田中真治さん宅(川上町地頭)の水田

7月上旬から花が咲き始め、8月中旬まで次々と咲き続けます。花は早朝から咲き始め、昼ごろには閉じます。3日間開閉を繰り返し、4日目の午後には全ての花卉が散ってしまいます。ハスの根元にはカエルやドジョウも生息しています。花を見ながら絵を書いたり、写真を撮ったり、歌を詠んだりする人が訪れます。

川上  
光市さん(成羽町長地)



## 作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など
  - 【作品】絵画、工芸品、町の風景写真など
  - 自作の未発表作品で、一人一作品とします。
  - ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。  
(撮影が困難な場合は、ご連絡ください)
  - 住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。
- ※締め切り 掲載号の前月の末日(必着)

- 問い合わせ・送り先  
〒716-8501 (住所不要)  
高梁市役所企画課公聴広報係 ☎0210  
Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp
- ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。  
※提供いただいた写真等は返却できません。

# 市民へ

## 文芸たかはし

### 短歌

(敬称略)

恋文もメールで済む世の味気なき時代おくれの我らに乾杯

井上 明彦 (備中町平川)

日中の暑さわすれる風鈴のすずやかな音が風をもてくる

梅野 八郎 (松山)

忘却を自然現象と受けとめて日々の暮らしを楽しく過ごさむ

小野はる恵 (原田南町)

群青の色にかくれて紫陽花のピンクはそっとそっと顔出す

亀石恵美子 (川上町仁賀)

星の郷生きた文化の備中神楽洋行してパリの地で舞う

下向 近雄 (備中町平川)

軒下にてるく坊主風にゆれひ孫の教だけ残して去りぬ

田中 弘子 (川上町領家)

友の弾く大正琴の指捌き見つつ歌ひぬここに幸され

平 初音 (高倉町田井)

滾つ瀬に白波たてて成羽川流れて水は淵に淀みぬ

榊上 秀雄 (備中町西山)

青あらしべにうつき咲き初夏の花風にゆれておとめの姿

森崎 道子 (宇治町宇治)

俳句

梅雨明けの涼を求めし紺屋川 妹尾 昌美 (東町)

蜩の鳴く声あつし熱帯夜 平松 幾代 (長寿園内)

朝ぎりにもえ立ちいるや合歡の花 結城 成子 (宇治町宇治)

川柳

酒呑んで腹をすえれば敵はなし 亀川 蕪 (川上町七地)

一ゲートやと通ればあと五分 川上 和正 (川上町七地)

やれ朝だ出来る事から先づ一步 藤井タツ子 (備中町西山)

腹の中云わがままでえびす顔 三笠 久子 (川上町七地)

わずかでも安いチラシに足が向き 吉岡 麻江 (鶴寿荘内)

## 地名とふるし

### 二十二 高山



「高山」という地名は現在の川上町「高山」と「高山市」の二つの大字名として残っています。「高山」は昔の「高山村」、領家川の上流域で川上町上大竹の北方に位置しています。東に川上町七地、西に川上町大原や「高山市」があります。

この付近は海拔四五〇m以下の「川上面」といわれる小起伏の地形が広がる地域で、山砂利層と呼ばれる礫層(「高瀬層」)が分布する代表的な場所なのです。そして、八〇〇万年前の玄武岩で出来た残丘状の谷の斜面やくぼ地に分布しています。

また、西にある「高山市」は、西側を広島県との県境に接し、南は井原市芳井町東三原に接しています。「高山市」付近は、標高五五〇〜六〇〇m前後の古備高原面の占める地域で「高山市」の集落の東には、玄武岩の残丘といわれる弥高山(六五四m)がそびえています。中心の集落は高原状にできた街村(列状村落)を形成していて、江戸時代から大正の頃まで栄えた市場集落で毎月五日に開かれる三齋市としてにぎわいました。特に穴門山神社の祭礼日の旧暦二月・六月・一〇月の「巳」の日は有名でした。「高山市」が笠岡東城往來の中間地点でもあり、成羽高山市往來も合流する場所で、物資の集散地として市場町・宿場町として、穴門山神社の門前町として栄えた町でした。今でも牛市場の跡や博労座の跡、商売繁盛を願うえびす宮、上市や中町などの地名など昔の繁栄の面影を残しています。

中世の記録「古備津宮流鏑馬料足納帳」(岡山県古文書集)の中に、「康正三年(一四五七)分 流鏑馬料足之事 五百文 ころやま直納」と書かれ「ころやま」の地名が見えています。一六三八年頃の寛永備中国絵図に「高山村高五八〇石余、うち松山藩領一〇三石余、山崎家治領分四七七石余」となっていて松山藩領が後の「高山市村」にあたり、山崎領が後の「高山村」に含まれています。その後の「正保郷帳」(一六四五〜四六頃)で「井戸高山村」四七七石余幕府領、「高山市村」一〇三石余と二つの村に別れ、江戸時代終り頃の「天

保郷帳」(天保五年一八三四)には「高山村」七六〇石余、「大原村」四〇石余、「高山市村」一三八石余と三か村に別れています。以後明治二二年から昭和二九年まで再び「高山村」となり、昭和二九年から川上町の「高山」・「高山市」などの大字名となって現在に至っています。「高山村」は畑作地帯で水田率は幕末で約二六%と低く、農民の生活も苦しく、年貢未納の百姓が続出、その上村役人の不正に対する不満、年貢の軽減などを求めて「村方騒動」(川上町史)が各地で起こっているのです。一方「高山市村」は、市場集落が発達していた天明八年(二七八)の「備中国川上郡領家村明細帳」(川上町史)に「当村諸用相調者 成羽町高山市村」(買調申候)と書かれ、当時から成羽と高山市が商業の中心だったことが分かるのです。

高山市から北へ権現谷の参道を下つていくと穴門山神社が鎮座しています。寛永九年(一六三三)に本殿焼失したため同一四年松山藩主池田長常によって拝殿が再建され、寛文九年(一六六九)水谷勝宗が本殿を再建寄進していて、本殿は県指定の重要文化財となっています。そして、弥高山は釣鐘状の残丘で展望が素晴らしく県指定の名勝になっていて観光地として素晴らしい場所なのです。まさに「弥(もつとも、いちばん)高山」なのです。

「高山」という地名は各地に見られ「高山」「甲山」「高山」「向山」など共通した意味があります。例えば、その地域で目立つ山があれば「神の山」だったし、「信仰の山」だったのです。そういう山は神秘的で人々は昔から大切に守り見てきました。「高山」は背後にある高い山(神の山)に由来する地名なのです。

(文・松前俊洋さん)



高山市から弥高山方面を望む